

幼稚園における高校生との交流

—園児と高校生の共育ちの視点から—

松 本 秀 藏
(熊本・中央幼稚園)

1. はじめに

元来、子どもの生活の場には「地域」や子どもを支える「家庭」があり「社会の教育力」が大きく作用していた。

現代の急激な社会変化は人間関係を希薄にし、子育てや異年齢仲間集団の在り方も大きく変化させてしまった。

このような状況の中で本園では現代版の「地域」である異年齢仲間集団の再構築を幼稚園や地域で取り戻す運動を行なっている。

このことは多様な人間のサンプルを園児に提供し本園の保育力の強化につながると確信している。今後、できる限り園を開放して異世代交流の重要性や相互の理解を深め「共育ち」の視点から地域との連携を図っていきたい。

2. 交流実践園の指定を受けて

本園は平成12年～13年度文部科学省高校生保育介護体験総合推進事業実践研究園として委託を受けた。平成14年度は、この交流実践も一層深まり、園児の心身の健全育成には異年齢交流が重要であることを改めて痛感した。

日頃から高校生と接する機会は少ない中、この3年間の交流は多くの課題を持ちながらも、本地区近隣5高校を初め本園保護者の支援で多大な収穫を得た。

この交流で本園から2Km内の公立高校(3)私立高校(2)との担当者連絡会を結成することができ、各高校及び担当教諭に配慮をいただいた。より良い交流のため次の点に留意した。

- (1) 本交流の計画、実施に当たって目的についての職員間の吟味、カリキュラム編成等高校生受け入れ体制作りが重要である。
 - (2) 園児から交流時の「つぶやき」の聴き取り、また家庭における交流に関する園児の様子等を保護者に依頼し園児の気持を反映させる。
 - (3) 当事者である高校生の感想、意見等を集約し本交流の意義や成果等を確認する。
- この平成14年度の交流で高校生は14回に亘り、延べ450名の生徒が来園した。

また韓国女子高校生、地元看護科学生4回(45名)、中学生4回(152名)、小学生2回(42名)の訪問を受けるに至った。

3. 園児と高校生の共育ちの視点から

高校生に園訪問前後のアンケートが実施され、主な結果は次の通りである。

(1) 高校生の本園訪問前のアンケート

(2年生園芸科42名分)

問) 最近、小さい子どもと触れ合いましたか?

(ある18名 ない24名)

問) あなたは小さい子どもは好きですか?

(好き24名 どちらでもない17名 嫌い1名)

問) その理由は?

(かわいい19名 おもしろい2名 素直だから、むかつく)

問) 今回、幼稚園に行くのは楽しみですか?

(はい23名 いいえ15名 ふつう4名)

問) 幼稚園に行くのに不安はありますか?

(ある17名 ない25名)

問) 何が不安ですか?

(なついてくれるか5名 遊べるか3名
どう接したらよいか、どのような遊びをすればよいか)

(2) 高校生の訪問後のアンケート(2年園芸科41名) の結果は次の通りである。

問) 幼稚園は楽しかったですか?

(はい41名 いいえ0名)

問) その理由は?

(子どもと楽しく遊べた14名 仲良く出来た10名
かわいい、笑顔、元気、面白かった等)

問) 一緒に遊んで気づいたことは何ですか?

(子どもの純粋さ・素直さ・体力のすごさ・元気・手加減なし・自分達よりなんでも真剣に取り組んだ・体で表現する等)

問) 園児と一緒に遊んで気をつけたことは?

(手加減・力加減・言葉遣い・けんか・みんなの意見を聴くこと・危ない時は止めること等)

(3) 高校生の訪問感想文は次の通りである。

●子どもの笑顔を見て私までつられて笑顔になっているのがわかった。いっぱいパワーをもらった。目が輝いているというのがわかった。何事も素直で一生懸命な子ども達と触れ合い私も素直になれた気がする。

(男子)

●私たちのクラスは「かるた遊び」だった。とれる枚数に大きく差がつき、とれなくて泣きそうになって

いる子もいた。でも「2枚も、とれたよ」とうれしそうに笑っている子もいた。その子が「昨日はできなかったことが今日はできた。」と言い、私は自分の今の生活で喜ぶことはあったかなと考えてしまった。(女子)

●園児は今度は自分の夢を話してくれた。「僕はウルトラマンガイヤになる」「お姉ちゃんは何になりたいの?」と聞いてきた。その時私は正直、戸惑った。それは今、迷っているからだ。だから私は「幼稚園の先生か、調理をする人」と答えた。そしたら「そっか」と言ってご飯を口にはおぼって私を見て笑った。私は子どもたちのパワーをもらった。(女子)

●子どもの考え方や物の見方・視点が自分と微妙に違い自分の視野が広がったし学んだ。例えば「魚釣り」では園児は釣る楽しさもあれば釣った魚を戻す楽しさも持っていた。また、明らかに死んでいるとわかる虫でも「ねんねしているんだよ」とか「疲れたから動かないんだ」という見方をしていた。(男子)

(4) 園児のつぶやき(保育者の手帳から)

8月29日「お兄ちゃん、かっこいい!」

お弁当を食べている時、男の子同士、些細なことで喧嘩になる。それを見ていたお兄さんが高校生「男は最初に手を出したらいかんと!」
U男「……。」

黙って、少し悔しそうな表情であるが、高校生「男だけん。」

U男「……。」

黙ってうなづく。

自由遊びのあと、

U男「お兄ちゃん、かっこいい!」

(保育者のコメント)

男としてかかわっている高校生からの言葉が印象に残り、U男も素直にお兄さんからの言葉を受け止めた。憧れのようなものをいただき、女性には無い男性の魅力を受けとめている。

このように高校生にとって幼稚園訪問は「学校で教えられる存在」から主体的に子どもに関わる存在に変身する。いわば、園児に対して保育者に近い存在として関わり、教える存在、育てる存在として自分を表現したり自尊感情を高めたと考えられる。

つまり、園児が体ごと全身全霊をかけて、コミュニケーションを高校生に要求することにより高校生も体で内的な欲求を表現し結果、子どもの頃に体験した遊びごころが呼び醒まされる。このことから高校生は園児から遊びを学んでいるし主体的な自分を取り戻す場になると考えられる。今回、不登校ぎみの生徒がこの交流を通じて心が癒され元気になっていく事例と出会った。

4. 高校教諭、本園保護者の視点・感想

本交流に携わった人々の反応として高校教諭は日頃、高校生活でみせない生徒の動作や笑顔など主体的に取り組む姿の感想を述べている。

(1) 県立高校教諭の感想(女性)

生徒が「感じたこと」「考えたこと」をこれ程、言葉に表現できるかと感心し感動している。園児に触れ合ったことで生徒の中には今の自分を振り返り今後どのようにしていけばよいか見つけた生徒もいる。幼稚園訪問は短い時間での交流なのに多くの事が学べているのに驚く。おとなしい学生が満面な笑顔で子ども達と話す姿も大発見であった。

(2) 県立高校教諭の感想(男性)

この交流で園児の喜び、楽しんでくれた姿、幼稚園の保護者の感想に「機関車トーマス」への感激の気持ちが多くみられたことは大変うれしい事です。本校生にとっても、夜遅くまで学校に残り機関車を製作した苦労は園児の喜ぶ笑顔で報われ、生徒達にとっても大きな喜びであり、すばらしい経験につながった。

(3) この機関車トーマスに関する本園の保護者から多くの感想をいただいた。

- ㊶ 園庭を力強く走るトーマス機関車には親子共々“感動”いたしました。
- ㊷ 高校生の皆さんが園児のために……。と暖かい気持ちで創り上げて下さり本当に親として感謝で一杯。
- ㊸ トーマス電車を園に設置の時、兄弟うれしそうに家に帰ってきました。何があったのか“ひみつ”を教えてくださいません。トーマスを聞き出すのには一苦労しました。

5. おわりに

高校生の交流保育は高校生自身にとっても園児にとっても、かなり実の多い実践である。今後も少子化社会は否応なく進行する中で様々な交流保育の試みは、さらに重要になっていく。今後、この連携が明確になることは、青少年育成にも大きな問題提起であり、地域交流や情報交換しながら類似の事例が普及するよう努力したい。

この試みは園児と高校生が共育ちの視点から次のようにまとめることができる。

- (1) 園児にとって……多様な親しい他人との触れ合いの場となる。
- (2) 高校生にとって……主体的に自分を取り戻す場、癒しの場、全身を通してコミュニケーションの再確認の場、子育て体験の場となる。